批評・紹介

吉川忠夫著
六朝精神史研究

中村圭爾

一

吉川忠夫氏が、現在、六朝時代を中心とする思想・學術・宗教の研究において、もっとも主導的な役割をはたしている旗手であることは誰しもがみとめるところであろう。氏がその二十餘年にわたる研究を集成し、一部補訂・改稿のうえ上梓されたのが本書である。

本書に收錄された論文は十七篇（これは氏の既發表論文のすべてではない）、それがのちにふれるように、全五部十六章に配列されている。それらの公表年次にはひとつの傾向をみいだすことができる。一九七〇年までに公表されたものがほぼ第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ部にまとめられているが、それらは主として門閥貴族と思想・學術の關連をあつかったものであり、第Ⅰ・Ⅴ部にあるそれ以後のものがいわゆる宗教に關するもので、そのうち前半期では佛教が、そして後半期では道教に主たる關心がそそがれているようにみうけられる。それはそのまま二十餘年にわたる氏の研究の軌跡の一部をあらわすものであろう。

二

本書はつぎのように構成されている。

序章　六朝士大夫の精神生活

第Ⅰ部　漢から六朝へ

第一章　黨錮と學問――とくに何休の場合――

第二章　眞人と革命

第Ⅱ部　范氏研究

第三章　范寧の學問

第四章　踞食論爭をめぐって

第五章　范曄と劉知幾

第六章　范曄と後漢末期

第Ⅲ部　沈約研究

第七章　沈約の傳記と生活

第八章　沈約の思想

第Ⅳ部　顏氏研究

第九章　顏之推論

第十章　顏師古の『漢書』注

第Ⅴ部　六朝人と宗教

第十一章　師受考――『抱朴子』內篇によせて――

第十二章　中土邊土の論爭

第十三章　夷夏論爭

第十四章　中國における排佛論の形成

第十五章　六朝時代における『孝經』の受容

なお末尾に後記と索引が付されている。

みられるとおり、この構成は整然としているだけではなく、一定の論理のもとにあり、氏の研究の體系をあらわすものとなっている。

つぎに本書の概要を紹介しておこう。もっとも、本書の各章はいずれも濃密な内容をもっており、それをさらに要約することは容易でないうえ、後記では各部各章の意圖とその内容の解説を氏自身がおこなっておられて、それにまさる要約はない。それゆえ、ここでは單なる各章の梗概をのべるにとどめる。

序章は漢六朝閒の思想・宗教の展開過程を、漢帝國の崩壞から六朝貴族社會をへてその動搖にいたるまでの體制の變化と關連づけて概觀したもので、儒學の變容と複數の價値併在の承認、佛教受容の條件、三教の價値併在をみとめる「跡」と「所以跡」という概念などがとりあげられ、また六朝知識人の隱逸、山水、「自然」の思想や、士大夫層の社會の變化への對應（自己變革）などが論じられている。

第Ⅰ部第一章では、後漢後半の太學とその學問の荒廢、しかもその一因であった太學生の清流運動への關與に起因する黨禁の打擊による太學衰退のなかで、地方の私塾が活況を呈し、そこを土壤に學問が興起したことをあきらかにし、そのような狀況下に生きた人物として何休をとりあげ、その著『公羊解詁』の精密な分析を通して、何休の學問に清流運動との共通性をみいだす。第二章は、漢魏禪讓革命において「眞人」なる存在概念が重要な役割をおびている——曹丕が眞人に擬せられているらしいことなど——という事實をあきらかにするところから出發し、かような天命とかかわりあう眞人の系譜をたどって、それが前後漢の交にあらわれること、後漢になるとそれが『太平經』にあらわれることを指摘する。

第Ⅱ部は南陽の門閥たる范氏の三代、寧・泰・曄の學術・思想・宗教信仰の分析であり、かつそれを中心とした門閥史である。第三章では、范寧の生涯を丹念においつつ、儒學の用の側面を強調するその態度、あるいは地方官としての儒家の教説による地方教化の實踐、その挫折などをのべる。ついでその著『穀梁傳集解』をとりあげ、范氏諸子弟と門生たちが自由討論によってこの著を完成させる過程や、そこにみられる合理的な解釋、一傳に拘泥しないかれらの自由な制作態度などをあきらかにする。第四章は、范寧の長子で、熱心な佛教信者の范泰がその晩年に一方の當事者としてかかわった踞食論爭（インド流の食事作法の可否についての論爭）の經過と、強硬な反對論者范泰の主張を分析する。第五章は、劉知幾による范曄『後漢書』批判の檢討を通じて、その批判が范曄自身は自信と愛着をもっていた部分にむけられていることを明確にしたうえ、その差から「人閒を評價するための複數の尺度が存在」するという六朝時代特有の意識を剔出する。第六章は、『後漢書』の序、論などから、後漢末期の士人社會に對する范曄の認識を探り、逸民に對して否定的、黨人に對して肯定的な評價をかれがもっていたこと、また行爲の結果ではなく、動機を尊重する立場に范曄がたっていたことなどをあきらかにする。

第Ⅲ部は、南朝の門閥貴族社會における寒門・庶人の擡頭にあって、かれらの有力な武器となったものこそ、貴族によって占有されてきた文化傳統であったのではないかという視點からものされた吳姓の寒門沈約の傳記と思想の研究である。第七章は、沈約の生涯と生活を、當時の政治史のなかに位置づけながら描寫し、かれが頭角をのばしえたのはすぐれた文學的才能を保有していたからであり、

一方、そのような個人的能力が評價されうるまでに門閥社會も變質しはじめていたととく。第八章は、まず沈約の社會認識が士庶を辨別し、士人こそが政治の擔當者であるとするものであったこと、その士とはかれにとって門地と同時に文化の保持者でもなければならなかったと論ずる。そして道佛と矛盾なくかかわる沈約の精神生活のありよう、調和を尊び、したがって變革の論理を缺落させてしまうという沈約の世界觀なども指摘されている。

第Ⅳ部は、顏氏における著名の二人、之推と師古をとりあげる。之推をあつかう第九章、『家訓』のなかに鋭い江南貴族社會批判のあること、それは江南貴族社會における顏氏のアウト・サイダー的な位置、さらにはのちにかれがふれた華北社會のありかたに起因するものと論じ、ついで之推の學問が現實世界に對する關心の重視をその立場とするものであることを確認し、最後に、それが實踐にうつされたときの具體的な身の處し方を描寫する。第十章は、顏師古と『漢書』注についての精緻な分析であるが、とりわけ周到な準備のうかがわれる雄篇である。はじめに師古以前の漢書學が要約され、ついで師古注そのものとそれ以前の注家の注の比較を通して、師古注の性格がしだいに浮彫りにされてゆく。

第Ⅴ部第十一章は『抱朴子』內篇が力說する師受、つまり仙道は師から直接に授からねばならぬという主張に注目し、これを出發點に仙道傳授の祕儀的な樣相をあきらかにし、かかる方法によって傳授された葛洪にいたるまでの仙道の系譜を解明している。（ちなみに、『抱朴子』については、氏には「抱朴子の世界」上下、『史林』四七―五、六という初期に屬する研究があるが、本書には收錄されなかった。）

第十二章から第十四章までは、佛教の受容と普及に際して派生した傳統的文化との摩擦の問題がとりあつかわれる。第十二章は、中國ないし中華こそ世界・文化の中心であるという前提にたち、佛教が夷狄の教であるという事實をテコに主張される排佛論、これを排除するための論法である天竺中土說が天文曆法を根據に六朝時代に發生し、展開してゆく過程を論述する。第十三章は、劉宋の道士顧歡によって主張された「夷夏論」、すなわち道佛の道は本來一致しており、ただ中華と夷狄と、その俗が異なるゆえに教化の方法が異なるのみという主張――それは道佛の對立の調停を標榜しながら、實は激しい排佛論となる――と、それをめぐる論爭を分析し、當時の道佛をめぐる思想界の狀況の一端をうきあがらせる。第十四章は、標題のしめすように、中國における排佛論について、僧祐、顏之推、道宣三者の分類によりつつ、詳細に檢討をくわえたものであるが、隨所に六朝の思想・宗教の狀況についてのふかい造詣をうかがわせる記述がみえる。

第十五章は、本來非宗教的であるはずの儒家經典『孝經』がこの時代に宗教經典のごとくに讀誦され、宗教的呪術力が托されるだけでなく、隨葬されることもあったという現象を論じたものである。

三

いかにも無味乾燥なこのような紹介は含蓄にとむ本書の內容を歪曲するだけかもしれないが、著者がいかなる文化的諸現象を考究の對象にえらんだかを察せしめる役割くらいははたせよう。

さて、本書の內容について論評しようとすれば、まずはここに氏が詳細かつ精密な分析と考察をへてあきらかにしたさまざまな思

想・學術・宗教に關する諸問題そのものについて、その研究史上の意義をとうべきであろう。それらはいずれをとっても六朝時代の文化的諸現象の本質と不可分にかかわるものばかりであり、氏の研究の意義はきわめて重要であるとおもわれるからである。

たとえば、第V部にまとめられた諸論考は、六朝時代の宗教性にとむ時代的特質を見事に描寫するとともに、思想・宗教狀況の顯著な特徴である三教の關係を、單なる教義としてではなく、六朝文化全體の本質にかかわる問題として論じる點でとくに注目される。とりわけ第四・十二・十三・十四章などは、佛教受容と中國文化との葛藤のさまを、兩者の對立のもっとも尖鋭化する部分で鋭利に考察し、この當時の思想や時代の狀況の具體像を見事に描き出している。くわえて、從來華北にかたよりがちであった佛教研究に對して、南朝における佛教問題が正面きって論述されていることも特筆されねばならない。

また、三教の價値併在にかかわる道と跡、所以跡と跡のような、六朝の底流にあって文化狀況のありかたを規定した思考の存在の指摘などは、六朝時代を理解するうえに大きな示唆をあたえるものであろう。

このような點は本書の隨所にみとめられるところであり、本書のもっとも中心的な意義がここにあることは疑いをいれない。しかし、實のところ、評者にはかかる點について正確に論評する能力はないし、何よりも本書の意圖が氏自身のことばによれば「思想それ自體の展開過程の追究ではなく、思想・學術・宗教をこの時代の社會の枠組との照應關係のもとに考察することを主要な問題關心としている」(五六八頁) ところにあるというのである以上、論評の重心は主としてこの點におきたいとおもう。

さて、かような視座の具體化は隨所にみることができる。たとえば序章、漢から六朝にかけての儒教の絶對的價値の喪失とその變容、複數の價値併在という思想狀況の出現、そして知識人にみられる特異な思想の出現などという思想上の諸現象の展開過程は、漢帝國の崩壞、貴族制社會の成立と頽廢という政治的社會的諸條件の變化と不可分のものとして認識されている。

さらに具體的な例をとりあげれば、第II・IV部では、第一に家學としてあらわれる學術の世襲、第二にたとえば范氏三代の思想的系譜に端的にみられるごとき思考樣式の相傳という、六朝の學術・思想の特異な性格があきらかにされているが、それは當時の社會の枠組が門閥貴族制であることと密接に對應するものであるという理解がしめされている。

また、范氏三代、沈約、顏之推たちの思想が貴族制とのかかわりにおいて論じられていることも前節で紹介したとおりである。

これらはその一部の例にすぎないが、あらゆる思想・學術・宗教がそれ自體で存在しうるのではなく、當時の社會の枠組という具體的に認識された歷史的諸條件によってそのありかたを規定されているという發想が中心にすえられているところに本書の大きな特色があるとおもわれる。

ところで、かかる視座にたつ本書の主張は氏がこの社會の枠組とみなす六朝貴族制の問題に關しても、單に貴族制社會や士大夫の思想の特質を解明したというだけにとどまらず、きわめて示唆的なものをふくんでいる。たとえば、家學や思考樣式の世襲という現象は、門閥貴族の本質として從來いわれる宦婚などの政治的社會的側

面における排他的・閉鎖的な世襲性にくわえて、まったく異なる性格の世襲的な要素が門閥にあることをしめしている。それは門閥貴族制が単に政治的社會的な諸要素をその存立基盤にしているだけでなく、ひろい意味での文化をもそこにふくんでいると認識していることにほかならない。それは典型的には沈約や顔之推をとりあげた部分に見られるような、文化こそが貴族の貴族としての存立の基盤であるという認識ともつながる。このような貴族理解は貴族制の本質理解にとってもきわめて重要なものとなる。

このようにみてくると、氏があえてえらんだ思想と社會の枠組との照應關係ということばにこめられた意味が判然とするようにおもえる。単に思想的諸現象が社會の枠組によって規定されていることを解明するだけでなく、思想的諸現象のありかたそのものから社會の枠組の本質を照射すること、本書を際だって特色づけ、また意義づけている最大のものはこの點ではなかろうか。

このほか、すくなくとも本書の特色としてつぎの二點をあげたい。その第一は、史料讀解についてである。全篇通じて史料は讀み下されているが、難解な思想的著作がいとも平易、かつ的確に把握されている點は驚嘆のほかはない。

第二は、思想・學術・宗教の主體である人閒存在に對する分析の手法である。後漢の何休から唐の顔師古まで、本書にはすくなからぬ知識人がとりあげられているが、必要に應じて記述されるかれらの傳記は、當時の政治や社會の諸條件に規制された人閒存在のありかたを活寫するものとなっている。氏には『劉裕』(一九六六)、『王羲之』(一九七二)という、ある意味で六朝時代のそれぞれ典型をなす人物をとりあげた著書があり、そこでもすぐれた人物論が展開されていて、かかる特色が氏の研究全般を通じてみられるものであることがうかがわれる。なおこの點、沈約研究で「主題となる人物にたいして愛情にかける文章となったことを反省している」(五七四頁)という一文があるのは、氏の人物論の方法をうかがううえで興味深い。

本書の特色と意義については、なお言及すべきことがらがすくなくないが、紙幅の都合上、割愛することにしたい。

四

以上にのべたような本書にも、あえてさがせば、つぎのような部分に若干の疑問とする點、ないし考察の深化の必要を感じさせる點を指摘できるのではないかとおもう。

「非日常的なるもの、超現實的なるものに深く魅惑されざるをえなかった六朝人」(五一七頁)、「六朝時代はまことに宗教的な時代であった」(五五三頁)、これは氏の六朝時代觀の一面を端的にしめすことばであろう。實際、本書はこのような六朝時代をあざやかにうかびあがらせている。しかしながら、先述したような「社會の枠組との照應關係」という本書の基本的視點からいえば、この時代の社會の枠組を門閥貴族制とみなしたばあい、それと六朝時代、六朝人の宗教的性格とがいかにかかわるのかという點、換言すれば門閥貴族個人の宗教受容といった問題ではなく、「三教それぞれの枠組をこえたところの宗教的風土」(五五三頁)と社會體制としての門閥貴族制とのあいだに、はたして何らかの關連が存在するのか、それはまたいかなるものかという點については、なお十分に論じつくされているとはいいがたいようにおもわれる。

宗教にかぎれば、つぎのような問題もあろう。いったい、氏のように門閥貴族制がこの當時の社會の枠組であると認識したばあい、その門閥貴族制が門閥貴族層だけでなく、社會の全體をおおう歴史的概念でなければならないことはいうまでもなかろう。そうするとそれとの照應關係においてとりあつかわれるべき文化的諸現象は、門閥貴族層が排他的に占有する部分のみではなくて、よりひろい範圍、もしくはより下層のレベルまでをふくむものとなることは當然である。六朝精神史ということばには、氏の照準がここまでおよんでいることを忖度させるものがある。思想・學術はともかく、宗教については下層のレベルの問題がきわめて重要なものであることは疑いなかろう。しかしながら、この點に關しての考察は、第Ⅰ部で言及された「太平」の理想、第十五章の「孝經信仰」などにみられるものにとどまっている。もっとも、最近の論文「五、六世紀東方沿海地域と佛教」(『東洋史研究』四二―三)などには、ある地域社會全體のもつ一種の宗教的雰圍氣を重視する視點がみられ、むしろかかる問題は氏の今後の研究の射程にはいっていることをおもわせるのであるが。

いまひとつ、すでにふれたように、本書は思想・學術・宗教のありかたと門閥貴族制とのかかわりについての詳細な考察をその特色のひとつとするのであるが、さらにすすんで門閥貴族制の社會におけるそれらの現實的な意味についてもなお考察の餘地がのこされているのではなかろうか。寒門層の政治的社會的地位の向上にとって、文化の傳統の獲得が有力な武器のひとつであったのではないかという指摘(一九九頁)や、顔之推にみられるような學問の現實的な意味についての言及(第九章四)などをみていると、たしかにこの時代はそのような構造の社會であったことは理解できるが、ではなぜそうであったのか、またありえたのかという難問がまだのこされているように感じる。そしてそれは當然文化や學問を排他的に占有する階層だけではなく、そこから排除された階層をもふくめて考察されるべき問題となるはずであり、ひいてはそのような契機によって成立している門閥貴族制の本質にまで波及する問題となるであろう。

以上、吹毛に類する疑問を書きつらねてみた。氏が先刻承知されておられるかもしれないこのような論點をあえてとりあげたのは、それらが六朝史研究、とりわけ貴族制研究にとって重大な論點となるにちがいないと確信するからであり、その意味では、これらの諸點は本書がむしろ問題提起の點でも無視すべからざる內容をもっていることを證言するものということができよう。

五

はじめ本書書評の依頼をうけたとき、まず腦裏にうかんだのは、本書の對象とする領域にまったく無知な評者がよくその責をはたしうるであろうかという不安であった。しかし一方で、いわば未知の領域に白紙の狀態で挑戰すれば何かあたらしい視界がひらけるかもしれないという豫感と、これを機にあらためて勉強してみようという横着なきもちがあったこともたしかである。しかし讀み進むにつれてその不安は增大し、思想・學術・宗教それぞれ各個の問題についての論評は評者の能力と水準ではほとんど不可能にちかいことを自覺せざるをえなかった。というよりは、完全に壓倒されてしまったというのが正直なところかもしれない。結局、後記にある氏自身

の問題關心の所在についての發言にすがり、多少とも關心のある貴族制と關する部分に焦點をしぼらざるをえなかった——それもまた生半可なものにおわってしまったが——。そのため、論評がきわめて偏頗なものになってしまったことを讀者と、そして何よりも著者におわびしたい。本評によって本書の意義が矮小化されるようなことのないことを切に願うものである。

氏は後記であたらしい地平にむけて、今後の課題をみずから意欲的に設定しておられる。それらもふくめ、氏がますますその研究を發展させられることをお祈りするとともに、二十餘年の學的蓄積に非才の身をもって妄評をくわえたことをおわびして、筆をおきたい。

一九八四年二月　京都　同朋舎
A5版　五九四頁　一二〇〇〇圓

珠榮嘎校注
阿拉坦汗傳（蒙文）

若松　寛

本書は明末、內蒙古土默特（Tümed）部主阿拉坦汗（俺答汗。Altan qayan. 一五〇七—一五八一年）の蒙文傳記抄本の影印版と校注翻刻版とから成る。

この傳記の原名は、《Erdeni tunumal neretü sudur》（『寶の澄明と言う名の史書』）と言うが、又《Erdeni tolı neretü quriyangrui čadir》（『寶の鏡と言う名の總傳』）とも《Čagravarti altan qayan-u turuji》（『轉輪王アルタン－ハガンの傳記』）とも稱する。

その撰者は名不詳であるが、記述の內容から見てアルタン－ハガンの側近に居た、佛敎に明かるい人物（多分ラマ僧）と考えられる。

成書時期は、珠榮嘎（Jürongγa）氏の推定では一六〇七年春とされる（本書、校注者序文、三頁）。その論據は概ね以下の如く記されている。卽ち、傳記中に記された最も遲い紀年は丁未の年（ulayan qonin jil. 萬曆三十五年、一六〇七年）であるから、成書時期もこの年もしくはそれ以降と言うことになる。ところで本傳記中にはダヤン－ハガン（Dayan qayan）、サイン＝アラク－ハガン（Sayin alay qayan）、アルタン－ハガン、センゲ＝ドゥグレン－ハガン（Senggedügüreng qayan）の歷代ハガンが大位を繼いだ年と歿年とをいずれも明確に記しているのに反して、ナムタイ＝セチェン－ハガン（Namutai sečen qayan. 明史籍に言う扯力克）に關しては唯その大位を繼いだ年（丙戌の年。萬曆十四年、一五八六年）のみを言って、その歿年を記していない。ここから本傳記がナムタイ＝セチェン－ハガンの在位中に書かれたことが明らかとなる。『明史』神宗紀に據れば、このハガンの歿年は萬曆三十五年夏四月壬子（二十日）である。これより見ると、本傳記の成った年は萬曆三十五年（一六〇七年）春である可能性が非常に濃い。以上のように同氏は論じておられる。

周知の如く、從來明代蒙古史に關する最古の蒙文史書と目されて來たのは、一六三〇年代成書と推定される撰者不明『アルタン・トプチ（黃金史綱）』（Qad-un ündüsün quriyangrui altan tobči）である。これに比し『阿拉坦汗傳』は更に約三十年も古いことになり、明代蒙古史に關する最古の蒙文史籍と言うことになる。